

第35回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。

先月に引き続き、各部門の最優秀作品を紹介します。

■中学校2年生の部 最優秀賞

「便利」のための犠牲

弟子屈中学校 山野 一歩さん



今の時代は便利なものがたくさんある。スイッチを押すだけで電気がつき、部屋が明るくなる。蛇口をまわせば水がでて、きれいで安全な水が飲める。今の私達にとって、それは当たり前のことだ。でも私はこの本を読んで「便利」の裏には必ず「犠牲」があることを知った。

私達は水道の水を飲む。その水は、ダムからきているものも多いはずだ。とても便利だと思う。でもそのダムをつくるには広い土地がいる。自然を破壊してしまっただけではなく、村がダムに沈んでしまっただけもあるのだ。この本にでてきたダムになった村には、約千六百人も人が住んでいた。そしてその人達は、ダムをつくるため、私達の便利のために、長年住みなれた自分の村を離れなくてはならなくなった。もしも自分の住んでいる場所がダムになり、そのために町を離れることになったら、私はどう思うだろう。きつと今までの思い出の場所が沈む悲しさと、何もできないことの悔しさとで、何もかもが嫌になってしまっただろう。しかもこの村の人達はお年寄りが多く、七十年も八十年もずっと村にいた人

達ばかりだ。村が沈むことは、その人達の生活自体が沈むようなもので、私が想像する辛さなど比べものにならないほど辛いだろう。実際、ダムができた後の村の住民達は、田舎から都会へ移り住み、ほぼ自給自足の生活から、とても便利な生活に変わった。でも、都会に来てから笑顔が消えたそう。私は、便利すぎることは本当に良いことなのか疑問に思えてきた。自然を破壊し、人々の笑顔を消してまでして、手に入れるようなものなのだろうか。

この本を読んで気付いたことがもう一つある。それはあまりが便利になることで、人とのつながりがなくなってしまうという点だ。昔のようにみんなで協力して畑をつくり、誰かが困っていたらまわりがそれを助けてあげる、ということが、今ではなくなっていると思う。きつと昔は、協力せずには生活できなかったことが、便利になっていくことで、一人でできるよつになつてしまったからだろう。確かに私も、近くに住んでいる人と、あいさつをすることはあつても大した関わりはない。これは「便利」になることが生み出した、一つの「犠牲」ではないだろうか。

この本の作者が「自分達の暮らしが、ダムをつくることにつながつてしまつた。」と言っている。自分達がエネルギーをたくさん使うせいで、そのエネルギーを補うための犠牲が出てしまつたのだ。私は今までの当り前の生活を、見直すべきだと思つた。そつでない、まだまだ犠牲

は増え続けるだろう。私は最近、少しづつだが今までの生活を見つめ直してみた。「電気をこまめに消す」「無駄に物を買わない」など、誰にでもできる、とうるかやらなければならぬことだが、今まで私はあまり心掛けていなかった。「便利」に慣れすぎて、気にしていなかった。これから私は、小さなことからでも、少しでも未来の地球を守るよつに活動していきたい。少しでも犠牲を減らせるよつに。

(寸評)読書を通して、生活の中の便利さが多量の犠牲の上から成り立っていることに気づいた感じがよく伝わってきます。気づいた点について、今自分ができることから改善していこうという前向きな姿勢も素晴らしい作品になっています。



■中学校3年生の部 最優秀賞

僕と野球

弟子屈中学校 佐久間 健君



「野球」それは投げて、打つて、走つて、捕るといふ一チーム九人です。僕が野球に出会つたのは小学二年生頃で、テレビで巨人戦を見て「あんな風にもなりたくないな。」と思つてプラスチックのボールとバットで上級生の人たちと遊び始めました。

小さい学校なので、野球のクラブはないので休みの日は一人で壁や草ボールに向かつて軟球を投げたり、兄と二人で遊びました。その頃から負けず嫌いで打たれたら、涙を流し兄とケンカをするこつともよくありました。

そして、いよいよ中学生になりやつと念願の野球部に入ることができました。中三の先輩は、うまい人はかりでかつこよくて、そのプレーをマネしたりしながらいつも練習していました。でも、やつぱり投球フォームなどの基礎を小学校から学んでないので、同級生の仲間か

らはすく指導されました。さらに、バッターのプレッシャーなども初体験だったため、なかなかそのプレッシャーに慣れませんでした。

でも、イチローは記録を作つていくたび期待と重圧が高まっていくのに、ただ自分と向き合つてひたすらヒットを打ち続けています。僕は「無心になつて打つなんて絶対僕には無理だな。自信を持つことも必要なんだろうなあ。」と考えさせられました。

そして、僕も中二になりプレッシャーに苦しみました。先頭バッターなのにヒットが打てなくて、悔し涙を流した日もありました。

冬に入り筋トレの毎日、来年の最後の大会に向け汗をかいて頑張つていました。しかし二月のある日、違和感があつた腰に激痛が走りました。病院で診察したところ、「これはヘルニアですね。もう野球はしないほうが。」と衝撃を受けました。夢であつてほしいという思いと信じたくないという思いで頭がいっぱいになりました。涙が出そうになりましたが同情なんてされたくないで、必死に我慢して苦笑いをしていました。その後、母が買い物に行ったのを確認して僕は静かに涙を流しました。野球ができる幸せというものを身をもって感じました。

それから二週間ほど経ち、確認のため撮つていたMRIが返つてきて医者から先生から、「ヘルニアじゃない、髄角が壊れてただけですね。治るから大丈夫ですよ。」その瞬間、叫びたいほどの喜びが

こみあげてきました。「また仲間と大好きな野球ができる!!」いつもの空もその日は違って、より澄んだ青い空でした。

そして、最後の大会は一番ショートで先発出場して二回戦目に0-1で負けて僕の中学の野球は幕を閉じました。でもみんなが泣いてるなか僕は涙が出ませんでした。たぶんそれは、最後の大会で野球ができたことへの喜びと高校で頑張るんだという思いがあつたからだと思います。

イチローは野球は仕事ではなく、趣味に近いと言っています。そんなふうには好きなことだから、逆風を楽しめたり、毎日のケガ防止のストレッチを欠かさずしたりすることができるとなると思っていました。

この本を読んで僕は、改めてイチローのすごさや自分にとって野球とは何かを考えさせられました。また、野球から教わつたことが数えきれないほどあることも知りました。これからも僕は野球ができることの幸せを感じながら野球を続けたいと思つています。

(寸評)感想文を通じて、野球に対するひたむきな思いが伝わってきました。名プレーヤーに共感しながら素直に学んでゆく姿勢はこれからも大切にしてください。簡潔に書かれた読みやすい文章でした。

高校生の部の最優秀作品は、来月号で紹介いたします。
※生徒の学年は、コンクールの行われた平成21年度当時のものです。